公益財団法人　日本クリスチャン・アカデミー機関誌

はなしあい

題字　元総理 片山哲 筆

2026年2・3・4月号

編集発行人
公益財団法人　日本クリスチャン・アカデミー
代表理事　中村　信博
発行所
日本クリスチャン・アカデミー
京都市左京区一乗寺竹ノ内町２３
075（711）2147

NIPPON CHRISTIAN ACADEMY　第641号

「共にいる」ことから始まる セーフスペース ―はなしあいの土壌として

財団理事
山本　知恵

２０２４年に施行された「困難な問題を抱える女性への支援に関する法律（困難女性新法）」は、困難を個人の責任として切り分ける視点から、社会や関係性の中で生まれてきたものとして捉え直す、大きな方向転換を示しました。暴力、貧困、孤立、差別、不安定な家庭環境――それらは偶発的な出来事ではなく、長い時間をかけて織り込まれてきた構造の結果です。

この法律が私たちに投げかけている問いの一つが、「居場所」の意味です。支援制度に結びつく以前に、安心して身を置くことのできる場があるかどうか。評価されず、役割を求められず、語ることも語らないことも許される場所があるかどうか。それは福音書に繰り返し描かれる、イエスが人びとの「ただ共にいる場」をつくられた姿と、どこか重なって見えます。

私たちはこの「居場所づくり」を、明確にセーフスペース事業として捉える必要があります。セーフスペースとは、単に危険がない場所ではありません。否定されないこと、支配されないこと、急かされないこと、そして沈黙のままでいてもよいことが守られる空間です。神が人となられ、弱さの只中に身を置かれたように、安全と安心は、関係性の中でしか生まれません。

そのようなセーフスペースにおいて初めて、「はなしあい」が可能になります。「はなしあい」とは、正解にたどり着くための議論ではなく、誰かを説得するための対話でもありません。語られる言葉の背後にある経験や、言葉にならなかった痛みに耳を澄ますこと。そこには、すぐに理解することよりも、共に留まる忍耐が求められます。

特に、ＡＣＥ（逆境的小児期体験）を抱えて育った若い女性たちとの「はなしあい」は、容易ではありません。大人や制度への不信、関係が壊れることへの恐れが、「話す」ことそのものを困難にします。支援者の善意や励ましの言葉が、かえって傷を呼び覚ますことさえあります。「語っても大丈夫」という確信は、説明や約束ではなく、何度も裏切られなかった経験によって、少しずつ育まれていきます。

だからこそ、私たちに委ねられているのは、「何かをしてあげる」こと以上に、「共にいる」ことなのだと思います。変化が見えなくても、言葉が返ってこなくても、その場に居続けること。復活の希望を性急に語る前に、十字架の下に共に立つこと。そこからしか、本当の「はなしあい」は始まらないのではないでしょうか。

（公益財団法人日本ＹＷＣＡ　常務理事）

関東活動センター

●2025年度　宗教対話Ⅰ
読書会「キリスト教と文学」（全9回）

講師　詩人、日本聖書神学校講師　柴崎　聰さん

2025年5月～2026年3月 第3火曜(8・12月休会)
関東活動センター会議室

柴崎　聰　講師

私は、高校時代から読了した本をそのつど丹念に記録してきました。最初の作品は井上靖の『氷壁』でした。それから現在に至るまで六十六年間、その記録はとだえることはありませんでした。私の父は文学的な素養を身につけていた人ではありませんでしたが、河出書房新社から発行されていた『世界文学全集』（全一〇〇巻）を子どもたちのために備えてくれていました。

多くの名作に触れることによって文学が好きになり、出版社で働く道を選びました。二つの出版社で四十一年間編集者として働き、定年を過ぎたころ、大学院での学びの機会が与えられました。その後、複数の大学から声がかかり、講師を務めました。その講座名が「文学とキリスト教」でした。私の著作『詩の喜び　詩の悲しみ』（新教出版社）を教科書にしましたが、一般者向けの公開講座も依頼され、講座名を思い切って「キリスト教と文学」に変更し、外国文学と日本文学を交互に取り上げることにしました。

その講座で取り上げた作品は、一〇〇冊を超え、試行錯誤を繰り返したのち、作者紹介、作品背景、作品構成・語り手・人称、登場人物、重要表現、作品主題の順序で話すことになりました。作者の経歴を知ってから作品を読み込むことを、必ずしも好ましいとは思えませんでしたので、作者紹介は極力短くし、深入りしないようにしました。作品の持つ広がりと深さを作者の人生をたどりすぎることによって狭めてしまうからであり、作品そのものの成長を阻害することにもつながりかねない恐れがあるからです。

この講座ほどに、私が真剣に文学に向き合ったことは一度もありませんでした。心身を傾注した本当の学びは、この時に深化したと断言できます。十年以上にわたってこの方式で講座を持ちましたが、新型コロナの流行により講座を一旦休止せざるを得なくなりました。コロナ禍が治まってからも、大学存続の都合でやむなく講座を閉じることを余儀なくされました。

今振り返ると、私が感銘を受けた作品には、長篇が多かったように思います。飯嶋和一の『出星前夜』、遠藤周作の『侍』、ウンベルト・エーコの『薔薇の名前』、スタインベックの『エデンの東』、ドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』、加賀乙彦の『宣告』『湿原』などですが、それらの長篇を受講者とともに読み通せたことを誇りに思っています。

今回の読書会では、主催者側から長篇はなるべく避けるようにという要請がなされていますので、長篇の作品は、ドストエフスキーの『罪と罰』以外、一冊も取り上げてはおりません。

私の脳裏には、私自身が命名した講座名にもかかわらず、いつも「キリスト教と文学」と「キリスト教文学」の相違はどこにあるのかという疑問が湧いてきます。「と」が入ることによって取り上げられる本の範囲は広がりますが、私としては、それほどの違いを感じてはいません。

私が尊敬する日本文学者の佐藤泰正先生の定義を念頭に置きながら、「キリスト教文学」とは、「キリスト教徒でない作家・詩人であっても、その文学的営為の根拠にキリスト教や聖書があり、そこからのメッセージと格闘しながらも、それに捕らえられ促されて表出する文学である」と定義しておきたいと思います。作品の中に私たちへのいぶし銀のようなメッセージを見出すことできたなら、講師冥利に尽きることです。

来年度は、受講者の了解も得て、私たちの人生の琴線に触れる作品を選び学んでいきたいと願っております。

（柴崎　聰）

◇2025年度紹介

第1回（5月）
デュ・モーリア
『レベッカ』

第2回（6月）
アルベール・カミュ
『異邦人』

第3回（7月）
三浦綾子
『氷点』（上）

第4回（9月）
グレアム・グリーン
『権力と栄光』

第5回（10月）
尹東柱の詩（韓国語で）

第6回（11月）
チャールズ・ディケンズ
『クリスマス・キャロル』

第7回（2026年1月）
遠藤周作
『わたしが・棄てた・女』

第8回（2026年2月）
スウィフト
『ガリヴァー旅行記』

第9回（2026年3月）
まどみちおと阪田寛夫の詩

※芥川龍之介『トロッコ』『おぎん』『白』は次年度にまわすこととしました。

関西セミナーハウス活動センター

●2025年度修学院フォーラム（「社会」第2回）
「エネルギーを考える」第13回
「なぜ生命を脅かす原発に今なお頼り続けるのか？」
講師　ジャーナリスト、作家、日本ペンクラブ言論表現副委員長　青木　美希さん
原発事故被害者団体連絡会共同代表　武藤　類子さん
2025年9月14日(日)～15日(月・祝)
会場　関西セミナーハウス

スリーマイル、チョルノービリ、福島での三つの原発事故は、人間が、原子核反応を原子炉内に閉じ込めて、発電のために使いこなすことは、不可能なことを明らかにした。原子炉内の核反応は、事故や地震、津波、火山などの天災や戦争などにより、人間の手のしばりを振り切り、暴走し、周辺の建造物を破壊し、空、海、山、川、野、田畑や住居を放射能で汚染し、人々を住処から追い立て、食べものを奪い、いのちを奪う。

原発事故の被災者は、今も平穏な生活と健康を奪われたままであり、癒されることがない。事故を起こした原子炉は今も強い放射能を出し続け、それを終息させる目途は立っていない。いくつもの原発が今も稼働を続け、放射性の廃棄物を出し続け、それらを廃棄する目途も立っていない。

それにも関わらず、政府と電力会社は、増大する電力需要に応じるためと称して、休止している原発を再稼働させ、新しい原発を増設しようとしている。

安全で、資源が豊富な太陽光発電や、風力発電などの再生可能エネルギーの技術が進展してきているにも関わらずである。なぜ私たちは、今なお原発に頼り続けようとするのか、それを一緒に考えたいと願って、このフォーラムを開催した。初めての人、若い人も含めて30名もの人が集まって、1泊2日密度の濃い、はなしあいを展開した。

フリーのジャーナリストの青木美希さんが、最初に鋭い指摘をされた。

原発は、ドローンなどの空からの攻撃に無防備である。英フィナンシャルタイムスが入手したロシアの攻撃目標のリストには、東海第二原発も入っている。世界最大級の使用済み核燃料の集積地である六ケ所再処理工場が攻撃対象になれば、チョルノービリ原発事故を数倍上回る放射能が放出される恐れがある。

福島原発事故から14年もたっているのに、今も数万人の人が避難中である。それにも関わらず政府は、避難民への住宅提供を打ち切り、避難民への医療費補助を打ち切り、避難民は、医者にもかかれないと嘆いている。

そんな状況下で政府は、何もなかったかの如くに、エネルギー基本計画から、「再エネに最優先に取り組む」の文言を削除し、原発の新設に取り組もうとしている。

今や、政府、官庁、業界、学者、メディアからなる「原子力ムラ」が、総力を挙げて日本の原子力発電を推進しようとしている。そのため膨大な補助金が原発推進のため投じられ、再エネ促進には、わずかな資金しか投じられない。

次いで、福島の原発事故被害者の武藤類子さんが、オンラインで現場からの訴えを語ってくださった。もともと武藤さんは、森の中でエネルギーや食糧の自給を目指す里山喫茶を開いていた。しかし、福島原発事故により、店を廃業せざるを得なくなり、原発のもたらす非人道性を他の被災者と共に訴えるようになった。

福島には、今も住居を強い放射能で汚染され、帰還できない人がいる。しかし政府は、避難民を避難先住宅から追い出そうとしている。事故を起こした原子炉は、今も放射性燃料塊を抱えたままで、取り出せる見込みが立っていない。放射性汚染水が溜まり続けるので、簡単な処理をしただけで、充分な安全保障もないまま海に捨てている。表土を削り取った汚染土がたまり続けるので、安全の保障もないまま利用し始めている。

そもそも東電は、原子炉の津波被害を予測できた筈である。それにもかかわらず、その対策を怠たり、大事故を引き起こしたのは、経営陣の責任である。それを裁判に訴えてきたが、裁判所はその責任を問うとしない。政府は、事故の責任を曖昧にしたまま、助けを必要とする被害者の口を封じ、置き去りにしている。その一方で、莫大な復興予算を投じて、災害便乗ビジネスを支援し、原発を推進しようとしている。

このような議論を通し、参加者は、次の世代のために、原発に依存する体制を早く脱却しなければならないと、感じさせられた。

〈協力プログラム〉
金属労協/JCM 第56回 労働リーダーシップコース
主催 全日本金属産業労働組合協議会
2025年10月16日(木)~11月1日(土)
関西セミナーハウス

本コースは、関西セミナーハウス開所後間もない1969年から、JCMとの協力により半世紀を超え、続いている。今回もJCM傘下の組合と友誼団体から、26名の受講生が参加し、17日間に及ぶ合宿形式のプログラムにより、全人格的な研鑽と相互の交流を深めた。学びと友情は、修了後も各職場、家庭で活かされる。

●2025年度「開発教育セミナー」第3回
「国連を超えて
～国際平和を探究する平和教育の実践から～」

講師　立命館大学国際地域研究所客員協力研究員、元・大阪府内私立国際学校（中学・高校）教員　野島　大輔さん

2025年10月4日(土)～5日(日)
会場　関西セミナーハウス

はじめに、世界平和度指数や戦争参加指数などにより、平和を維持する国と戦争を度重ねてきた国、さらには軍隊を持たない国が30ヶ国もあることを確かめた。これまで、人類は国連の枠組みや司法を整えたりしながら、平和への努力を積み重ねてきたが、戦争などの直接的暴力は、構造的暴力や文化的暴力から表面化して来たものであり、それらを含めた課題を解消することが大事だとの示唆があった。実際、平和ワーカーと呼ばれる人たちが、世界の150の紛争のうち、35を解決に導いたことや、中国と台湾の緊張関係を解消するために若者を集めた対話集会も開催されているという。

また、子どもたちは「なぜ戦争が起こるのか」を学びたがっているが、戦争への憎しみと命への尊厳を理解させる今の平和教育だけでは、若い世代のニーズに応えきれていないと提起された。人間が暴力に訴えるのは、創造性が欠如しているからだとして発明されたトランセンド法についての説明後、「一つのミカンを取り合う争い」や「複数学年で校庭を使用する争い」をどう解決していくのかを事例にして、トレーニングを受けた。

2日目は、それぞれの国には、無意識に共有されている発想法や考え方があり、危機が訪れたときに人々に連鎖的に支持されるような深層文化と、被植民地時代の国境線など紛争を起こしやすくしている見えない仕組みである深層構造についての解説とワークを受けた。これらの学びは、開発教育との重なりがとても大きいと感じた。

●2025年度「開発教育セミナー」第4回
「コモンズとしての食
～食と農を私たちの手に取り戻すには～」

講師　明治国際医療大学基礎教養講座助教／農学部設置準備室　山本　奈美さん

2025年11月1日(土)～2日(土)
会場　関西セミナーハウスとZoomによるオンライン

今回のテーマ「コモンズ」は、日本語では「入会地（いりあいち）」と訳されることが多いが、さまざまな世界的課題がある近年では、その意味は多様化し、動的で重層的なものとなっている。講師は、近代化以降、私有化されてきた「コモンズ」が現在の「食の商品化」にもつながっていることについて、ゲーム理論等を取り入れながら紐解いた。そして、「安全で栄養価に富み健康に良い食べ物」が富を持つ人しか食べられないのではなく、誰もが手に入れられるものになるよう、「コモンズ」を「食と農の課題を解決するためのツール」とすることの必要性を投げかけた。

災害や獣害、後継者不足など、農の課題は山積している。しかし、農には本来多面的な機能があり、「みんなが利するコモンズ」と「フードセキュリティ（食の安定的確保）」を考えることは、私たちの生活そのものを考えるということにつながる。「自分が食べることを自分で決めているのか？そこに外的・内的な環境が影響していないか？」という問いかけが印象に残った。

現在の課題ばかりに注目するのではなく、「理想」や「よい食」に目を向けて超越した考えを引き出すことが、「公正で持続可能な農と食」を構築することへとつながる。多くの限界や矛盾のある社会経済の中で、その限界や矛盾から目をそらさず、一つひとつの取り組みや政策を含めた社会の転換を「多様な農のまもり人」として支えることが理想を実現へとつなげることとなる。

なお、今回モニター協力により、オンライン併用を試みた。

関西セミナーハウス
秋のオープンハウス
2025年11月24日(月・休)　開催しました！

鮮やかに色づいた紅葉を楽しむ「秋のオープンハウス」が行われた。

おだやかな秋空の下、約150名の来館者は、中庭の野点席では、抹茶を味わい、能舞台では、大蔵流狂言師 茂山千三郎さんと一門「和儀（わぎ）」による、狂言「棒縛（ぼうしばり）」小舞「福ノ神」などの公演を鑑賞した。

館内ではスタンプラリーも行われた。栗ご飯弁当は、好評で、ほどなく売り切れになった。

●2025年度修学院フォーラム「いのち」第3回

「歴史からみる旧約聖書の思想
―唯一神信仰、契約思想、戦争と平和―」

講師　立教大学・上智大学名誉教授　月本　昭男さん

2025年11月2日(日)～3日(月・祝)

会場　関西セミナーハウス

パレスチナでは、今も熾烈な戦闘が続いている。ここは、旧約聖書を生み出した地である。この地の人々は旧約聖書を重んじて歩んできた筈である。旧約聖書には、このような戦争を正当化する思想があるのだろうか？そんな疑問を抱きつつ、旧約聖書の基本思想を訊ねるフォーラムを持った。旧約聖書と古代オリエント史を長年研究してこられた月本昭男先生に、旧約聖書の基本思想の中から唯一神信仰、契約思想、暴力性と排他性について、その成り立ちと、特徴を語って頂いた。

旧約聖書は、さまざまな神観の中から、最終的には唯一信仰の立場から編集された。それを明確に語っているのは、第二イザヤと呼ばれる預言者と申命記である。バビロニアに捕囚とされていたイスラエルの民に、解放の到来を告げたイザヤは、捕囚解放を実現する神ヤハウエは、世界を創造し、歴史を導く唯一の神であると語った。申命記は、イスラエルの民が、荒野の40年を経て約束の地に入る直前に、神ヤハウエが天地の主であり、ほかに神が存在しないことを明示されたと記した。

この唯一神信仰が、エジプト、アッシリア、バビロニア、ペルシャ、ヘレニズム王朝などの大国ではなく、大国に翻弄され続けた弱小のイスラエルの民の間で育まれ、それが後には、ユダヤ教に引き継がれ、キリスト教成立の土壌となり、さらにイスラム教の神観にまで大きな影響を及ぼしたのは、イスラエルは、神ヤハウエによって選ばれた民であるとの考えに立っていたからである。ただし、神ヤハウエがイスラエルを選ばれたのは、イスラエルが強く、優れた民であったためではなく、弱小の民であった故であった。神は、高きにありながら、地上の小さき者、弱者、貧者に思いを寄せる神であると考えられた。この旧約聖書の唯一神信仰が、ナザレのイエスの教えと実践に引き継がれた。

旧約聖書の思想のもう一つの特徴は、神が民と契約を交わし、その民を守り導かれるとする思想である。神は大洪水後、ノアとその子孫、及びあらゆる生き物と契約を結び、再びこれらを滅ぼさないと告げた（ノアの契約）。次いで神はアブラハムと契約を結び、子孫を増加させ、土地を与え、全民族を祝福すると約束された（アブラハム契約）。そして彼らが奴隷の地エジプトを脱出し、さまよった時、シナイ山の麓でモーセを通して律法を授け、彼らがそれを守ると誓った時、神は彼らと契約を結び、イスラエルの神となった（シナイ契約）。それでも彼らが神に従おうとしなかった時、神は再びモアブで律法を知らせ、契約を結び、律法を遵守すれば神の祝福が与えられるが、遵守しないなら神の呪いが下ると明記された（モアブ契約）。その後彼らがカナンの地に定住した時、民が異教の神々に仕えず、ヤハウエにのみ仕えることを約束したので、ヨシュアはそれを律法の書に記し、その証として大きな石を立てた（シェケム契約）。次いで彼らが王国を作った時、預言者ナタンはダビデ王朝の永続をヤハウエの約束として告げた（ダビデ契約）。しかし、この王国は紀元前586年にバビロニアによって滅ぼされ、消滅した。その中から、いつの日か再びダビデの家系からイスラエルの民を救いに導く理想の支配者が登場するというメシア待望が出てきた。エレミヤは、後の日にヤハウエは全イスラエルと「新しい契約」を結ぶ時代が来ると預言した。エレミヤによれば、新しい契約は一人一人の心に記され、それにより罪の許しが与えられる。新約聖書は、エレミヤの新しい契約預言がイエスによって成就されたと伝えた。これにより、新しい契約は、ユダヤ教という民族的枠を超えて、世界に広げられた。

しばしば旧約聖書に源をもつユダヤ教やキリスト教などの一神教は、自然破壊的で、暴力的で、排他的だと言われる。しかし人類は、古来多神教か一神教かを問わず、戦争を繰り返してきた。旧約聖書の初期の記事も戦争の記録で満ちている。イスラエルの民は、対外戦争に勝つために王を立て、王国を作った。ダビデも戦士であった。その背後には聖戦という観念があった。しかし、旧約聖書の中には、戦争を否定的に見る視点も芽生えていた。それを明確に語ったのは、預言者たちであった。彼らは、民の救いは神への信頼の他になく、神への信頼は、「正義と公正」の実践を伴わなければならない、と説いた。「正義と公正」とは、「孤児、寡婦、寄留者」に代表される社会的に弱い立場におかれた人々の保護であった。強力な軍事力を背景にした大国アッシリアやバビロニアでさえも滅亡の道をたどる中で、軍備は救いにならない、との信念が人々に共有されていった。その中から世界平和への希求が二様の仕方で表明された。一つは、地上のあらゆる民が神ヤハウエに帰依し、戦いを放棄する時代の到来。もう一つは、理想の支配者のよる平和の実現である。十字架で処刑されたナザレのイエスをメシアと信じたキリスト者たちは、イエスにおいてこれらの預言が成就したと信じた。イエスは、地上の統治者ではなかったが、平和を造り出す方途を教えた。イエスの教えは、彼の死後成立したキリスト教会に継承され、弟子たちは、平和の使徒とされた。キリスト者は、その務めとして、いかにして平和の使徒であり得るかが、問われている。

月本先生は、旧約聖書の伝える唯一信仰、契約思想、戦争思想は、いずれもイエスの平和思想へと受け継がれている、と結ばれた。

プログラム案内

◆関東活動センター

■2025 年度 聖書を読む講座Ⅰ
（共催：早稲田奉仕園）
「LGBTQ+と聖書」みんなで考えてみよう！
講　師：藤本　満さん（インマヌエル高津キリスト教会　牧師）
日　時：⑨2月10日、⑩3月10日火曜 19:30～21:00
参加費：全10回10,000円、学生5,000円
方　法：Zoom によるオンライン講座

■2025 年度 宗教対話Ⅰ
読書会「キリスト教と文学」
講　師：柴崎　聰さん（詩人、日本聖書神学校講師）
日　時：⑧2月17日、⑨3月17日火曜 14:00～15:30
参加費：1,000 円／回
会　場：関東活動センター会議室（キリスト教会館 1 階 16 号）

■2025 年度 宗教対話Ⅲ
福嶋揚と共にハンス・キュンクを読む
講　師：福嶋　揚さん（神学者）
日　時：⑧2 月27日金曜 16:30～18:00
参加費：全 8 回 10,000円、学生8,000円
方　法：Zoom によるオンライン講座

■2025 年度 話し方ワークショップ
「さらに豊かな礼拝のために
ことばを届けるトレーニング」
講　師：友野富美子さん（日本キリスト教団深川教会牧師）
日　時：⑨2月 20 日、⑩3 月20日金曜 19:00～20:30
参加費：各回 1,500 円／回
会　場：日本キリスト教団東中野教会

■2025 年度 神学生交流プログラム
講　師：加納　和寛さん（関西学院大学神学部教授）
校　長：神田　健次さん
日　時：3月23日（月）～25日（水）
場　所：関西セミナーハウス

◆関西セミナーハウス活動センター

■2025 年度 修学院フォーラム「社会」
第３回「新たな戦前No！
―琉球を戦場にしてはいけない」
講　師：金井　創さん（日本基督教団佐敷教会牧師）
日　時：2月14日（土）13:30～16:00
参加費：2,000 円 学生 500 円
方　法：会場 関西セミナーハウスとZoom併用

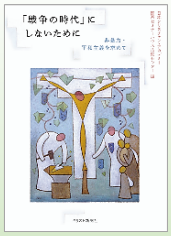
■2025 年度 修学院フォーラム「福祉」
第４回「ヤングケアラーで終わらない
ロングケアラー～障がいをもつ きょうだいがいる家庭で育った経験から～」
（共催：京都YWCA）
講　師：奥 真木さん、麻中 友美さん（京都「障害者」を持つ兄弟姉妹の会（京都きょうだい会））
日　時：3月7日（土）13:30～16:00
参加費：1,000 円 障がい者・学生500 円
方　法：会場 京都YWCAとZoom 併用

◆2026 年度予告

■2026 年度修学院フォーラム「社会」
第 1 回「尊厳の学び
～他者、そして自分を大切にするために」
講　師：ジェフリー・メンセンディークさん（桜美林大学ビジネスマネジメント学群准教授）
日　時：5月9日（土）
会　場：関西セミナーハウス

＜新刊案内＞

「戦争の時代」にしないために
非暴力・平和主義を求めて



戦争の反対は、平和ではない。対話だ。

日本クリスチャン・アカデミー関西セミナーハウス活動センター編
（キリスト新聞社刊）
2026 年 1 月 20 日発行
1,650 円（税込）

＊修学院フォーラム「戦争と平和」シリーズ講演録。

財団本部 HP　関東活動センターHP
関西セミナーハウス HP　KSH 活動センターHP

公益財団法人 日本クリスチャン・アカデミー
代表理事　中村　信博

本部事務局
〒606-8134 京都市左京区一乗寺竹ノ内町 23
TEL 075-711-2147
FAX 075-701-5256

関東活動センター
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田 2-3-18
日本キリスト教会館 1F
TEL 03-3207-6198
E-mail :info@academy-tokyo.com
郵便振替 00190-7-109437

関西セミナーハウス
〒606-8134 京都市左京区一乗寺竹ノ内町 23
TEL 075-711-2115
FAX 075-701-5256
E-mail :info@kansai-seminarhouse.com

関西セミナーハウス活動センター
〒606-8134 京都市左京区一乗寺竹ノ内町 23
TEL 075-711-2117
FAX 075-701-5256
E-mail :office@academy-kansai.org
郵便振替 01020-1-5184

賛助会費・寄付金報告

2025年10月1日~12月31日（順不同・敬称略）

◆財団本部
寄付
柳井　一朗

◆関東活動センター
賛助会費
松井　直樹
吉田　博
市川　邦雄
寄付
アジアキリスト教教育基金
日本基督教団早稲田教会
林　律
増田　博
日本キリスト教団経堂緑岡教会
神学生プログラム寄付
浦上　充
浦上　佳織
中村　信博
日本聖公会ウイリアムス神学館
関西学院大学神学部後援会
吉田　博
クリスマス寄付
川北　かおり
坂口　みどり
小林　誠治
河原田　美哉子
松下　起子
恵泉女学園中高・宗教部
最上　光宏
中井　博雅

◆関西セミナーハウス
寄付
名取　琢自
手島　洋
八田 尚嘉
神田 健次
小田 美乃里
西谷 直子
嶋吉 由香
AIG高校生外交官プログラム事務局
芝野 貴臣
神崎 清一
福田　為謙
秋のオープンハウス（匿名）
柴田 賢司
一般社団法人和儀茂山千三郎

◆関西セミナーハウス活動センター
賛助会費
金山　顕子
中上　和子
大谷　光真
菅　恒敏
桜井　希
西脇　洸一
寄付
福田　爲謙
村上　みか
柳井　一朗
桜井　希
杉本　尚司

クリスマス寄付
根岸　宏邦
福田　爲謙
小久保　正
林　律
伊藤　正子
藤田　恭子
濱崎　敦
木原　諄二
浦　晴子
藤田　敦子
橘　俊子
武山　泰子
多田出　佳代子
堤　龍春
今川　泰彦・喜子
山本　俊正
丸山　まり子
多木　秀雄
京都みぎわキリスト教会
竹中　百合子
井田　光昭
島田　恒
宮本　桂子
神崎　清一
日本基督教団和歌山新生伝道所
川北　かおり
吉田　力
木下　壽子
徳永　由美子
西尾　新
池田　令子
織田　雪江

以上、感謝を持ってご報告申し上げます。